



大阪府・私立
香ヶ丘リベルテ高校

進学指導

生徒目線の指導を徹底し、 表現教育科新設4年目で 公立大学合格者が誕生

◎堺愛泉女学校として設立。1991年に堺女子高校に、2012年に現校名に改称。美容芸術・ファッションビジネスなどの6コースある普通科と、表現科目を中心としたカリキュラムの表現教育科の2学科制。進学指導に力を入れるとともに、資格取得も見据えた専門性の高い教育を実践している。

設立	1922(大正11)年
形態	全日制／普通科・表現教育科／女子
生徒数	1学年約320人
2016年度入試合格実績(現浪計)	公立大は、大阪府立大に1人が合格。私立大は、日本体育大、法政大、京都産業大、同志社大、大阪大谷大、大阪芸術大、関西大、近畿大、桃山学院大、甲南女子大、兵庫医療大など、その他併設堺女子短大に進学。
住所	〒590-0012 大阪府堺市堺区浅香山町1-2-20
電話	072-238-7881
Web Site	http://www.liberte.ed.jp/

変革のステップ

背景

◎表現力ある女性を育成する「表現教育科」を設置し、国公立大学・難関私立大学の合格を目指す

STEP 1

実践

◎生徒指導の充実とともに、模試やオープンキャンパスの活用による進学意識向上、補習やICTの活用による学力向上を図る

STEP 2

成果

◎2016年、表現教育科新設4年目で初めての公立大学合格者が誕生。生徒の服装やマナーも大きく改善した

STEP 3

表現力ある女性の育成と
進路改革

2016年は、大阪府にある香ヶ丘リベルテ高校の95年の歴史において、大きな一歩を踏み出す年になった。表現教育科新設4年目で初の公立大学合格者が誕生したのである。生徒から電話で合格の報告を受けた進路指導チームの堀岡亮平先生は、その時の様子を次のように語る。

「朝から緊張感で張り詰めていた職員室の雰囲気は、生徒の電話で明るい雰囲気に一変しました。表現教育科の設置以降、失敗できないという責任と重圧を感じ続けていただけに、『合格』と聞いて、安心して力が抜けてしまうようでした。何よりも、生徒が最後まで目標に向かって頑張ってくれたことがうれしかったです」

同校が、多様な希望進路を持つ生徒のために、美容や保育、音楽などのコース制としたのは15年前のことだった。そして、12年度、新たな改革として文部科学省からも求められている、表現力あるグローバルな女性の育成に向けて、表現教育科を新設した。同科は、普通科のアクティブラートコースをより発展させ、声優・演技・ダンス・楽器などの身体表現だけでなく、スピーチ・ディベート・プレゼンテーションといった言語表現も取り入れ、コミュニケーション力を向上させることを目標とした。進路において

は、国公立大学・難関私立大学にも進学できる
学科として構想した。

表現教育科設置の背景には、09年の堺リベラル
中学校の設置があったと、菅野輝史教頭は語る。

「堺リベラル中学校でも表現教育を重視し
ており、高校でさらにその学びを深めたいと
願う生徒の受け皿にしたいという思いがあり
ました。好きなことを極めたい、夢を追い続け
たい生徒はもちろん、表現力を高めつつ大学
進学という目標を掲げる生徒にとっても、自
己実現を図れる学科にしたいと考えました」



香ヶ丘リベルテ高校 表現教育科教頭
菅野輝史 **すがの・あきひと**
教職歴22年。同校に赴任して22年目。「モットー
は『心を出せ』(心の中にある思いを出す。出会っ
た生徒は一生つき合っつもりで指導する)」



香ヶ丘リベルテ高校
神野孝裕 **じんの・たかひろ**
教職歴12年。同校に赴任して12年目。普通科1
学年担任。「モットーは『熱風がむしゃら』」



香ヶ丘リベルテ高校
堀岡亮平 **ほりおか・りょうへい**
教職歴11年。同校に赴任して5年目。表現教育
科チーフ、進路指導チーフ。「あらゆる事象を生
徒の学習につなげる」



香ヶ丘リベルテ高校
阪上宏樹 **さかうえ・ひろき**
教職歴5年。同校に赴任して4年目。表現教育
科教務チーフ。「周囲の人は自分の鏡。いつもブ
ラスの言葉で生徒と接する」

進学重視への転換は、同校にとって大きな挑
戦だった。それまで同校の大学・短大進学者は
指定校推薦入試の利用と併設校の短期大学への
進学が中心だった。また、表現教育科は専門学
科として教育課程を編成しており、その中で生
徒の志望を育み、さらに大学合格に必要な学力
をつけさせなければならぬ。このような背景
から、大きな改革の幕が開けた。

「ビジョナリーワード」で 理想の生徒像を示す

まず着手したのが、学習に向かう土台となる
生徒指導の強化だ。身だしなみやマナーを意
識した指導基準を教師間で共有し、生徒・保護者

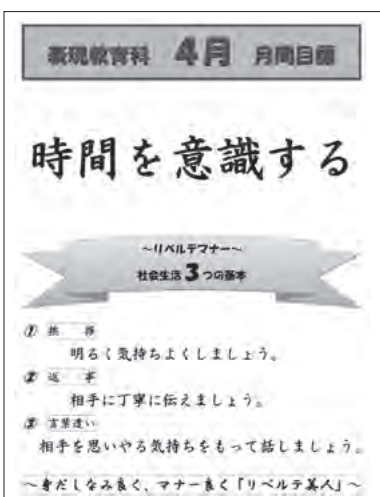


図 「リベルテマナー」と月間目標のポスター

「リベルテマナー」とともに、「月間
目標」として、教師が生徒に「して
ほしい」「なっ
てほしい」目標を考
え、掲示物にして
校内に貼り出して
いる。生徒と一緒
に教師も目標に向
かうという取り組
みだ。
*学校資料をその
まま掲載

に周知した。それまでの同校の校風から、予想
外の厳しさに反発する生徒も少なくなかった
が、教師は厳格さだけで生徒と接することはな
かった。生徒が理想とするような「ビジョナリ
ワード」を示して、主体的な変容を促したのだ。

「あれも駄目、これも駄目という否定的な
指導だけでは、生徒の反発を生むと思いま
した。『こんなリベルテ生だったら素敵だよ』
という理想の姿を示す方が、生徒も行動しや
すいと考え、生徒がイメージしやすく、手を
伸ばせば届きそうな言葉を、教師全員で検討
しました」(菅野教頭)

具体的には、社会生活の3つの基本として接
拶・返事・言葉遣いを「リベルテマナー」(図)
として掲げ、それを実践する生徒を「リベルテ
美人」と呼ぶようにした。毎年9月の学園祭で
は、生徒と教師の投票により「ミス・リベルテ」
を選び、表彰する。各クラスの代表者は、イン
タビューやクイズなどで「リベルテマナー」の
理解度や実践度を判定される。学校を挙げての
イベントにすることで生徒の意識に浸透させ、
マナーのよい生徒がたたえられる学校文化を醸
成している。

模試の結果が芳しくなくても 折れない心を育てる

次に注力したのが、進路意識の向上だ。表現

教育科1期生の半数以上は、入学当初、「どこかの大学に進学できればよい」と安易に進路を考えており、いかに生徒の進路意識を高め、それに見合う学力をつけさせるかは大きな課題だった。

入学時から生徒や保護者には、「頑張れば国立大学進学も夢ではない」と繰り返し伝え、進学意識の向上を図った。夏休み前には進路講演会を行い、大学進学のリットなどを説明したり、大学のオープンキャンパスへの参加を促したりした。

生徒に大学進学を意識させるために、ベネッセの進研模試も導入した(現在は進路マップ(※1)を導入)。1期生の1年次は、教師が生徒の学力に応じて個別に受験する模試を選んでいったが、2年次以降は年5回の模試を年間計画に組み込んだ。模試の結果は、担任が面談などで生徒一人ひとりに返却し、結果分析の内容や今後対策すべきことなどを伝えた。

「模試で芳しくない結果が出る度に自信を失い、大学進学を諦めそうになる生徒もいました。そこで、模試の結果に一喜一憂しないよう、日頃から『今は合格可能性が高くないでも大丈夫』と伝え、模試の結果を見ながら『この判定を1つ上げる力は十分にあるよ』などと励まし、生徒が常に前を向けるような声かけをしました」(堀岡先生)

オープンキャンパスで 大学への憧れを喚起する

大学のオープンキャンパスも積極的に活用した。生徒から希望者を募り、教師が引率して、大阪大学や関西大学などの難関大学、生徒に人気のある外国語系や芸術系の大学のイベントに参加した。

漫然とした見学に終わらないよう、工夫もした。例えば、学力の高い生徒には大阪大学の公開講座の受講を勧めたり、海外に興味がある生徒にはキャンパスで外国人と学生が語り合う様子を見せたりした。

「生徒によつては、キャンパスを回るルートまで示して、細かくスケジュールを組みました。それを機に、大学に憧れを抱き、進学を希望するようになった生徒も多くなりました。そのような高みを目指す生徒の姿勢が、クラス全体により刺激をもたらしてくれました」(堀岡先生)

教科指導でも、新しい取り組みを次々と導入した。放課後7〜9限目に実施する「勉強塾」は、難関大学を目指す生徒を対象とした特別補習で、1期生の2年次から開始。学力・志望に合わせて、ほぼ個別指導の形で受験科目の補習を実施した。3年次には予備校の講師を招いて、個別の志望に応じた対策講座も実施した。

夏季休業中には、2週間の「夏期学習セミナー」

を行った。今までは補充学習が中心だったが、表現教育科ではそれに加えて、大学志望者向けの講座も用意した。実施教科・科目は、国語、日本史、世界史、数学、化学、生物、英語、小論文で、1コマ90分。2年次からは中級と上級クラスに分けて実施し、成績上位層の生徒には自分の必要に応じた教科・科目を選択させ、成績下位層の生徒には中級クラスに必須で参加させた。

ICTで練習問題を配信し、 学習習慣の定着を促す

ICTの活用で指導効率を高めている点も、同校の変化の1つだ。その牽引役は、16年度に導入した「Classi」(※2)だ。2学期には、問題配信機能を利用して、定期考査や進路マップの「基礎力診断テスト」の前に、全生徒に練習問題の配信を始めた。生徒は各自、スマートフォンやタブレット端末、パソコンで問題を見ながら取り組む。そして、テストの後には振り返りの問題を配信し、復習を促す。教務チームの阪上宏樹先生はねらいをこう語る。

「本校の生徒に家庭学習習慣をより定着させるために、机に向かう時間が少しでも増えてほしいと考えています。さらに、テストの事前・事後の学習も大切であるという意識を浸透させるために、練習問題の配信を始めま

*1 生徒の「なりたい自分さがし」と「なりたい自分づくり」をサポートする教材(適性検査、学力検査などがある)。
*2 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

した」

表現教育科では、国語・数学・英語の課題を終礼時に提示し、翌朝の5分間で小テストを実施していた。それに代わる学習習慣定着の方策として、計画的に問題配信を始めた。

「『Classi』の問題配信機能を使えば、問題の選択肢が増えるとともに、生徒も自分の好きな時間・場所で問題に取り組みます。さらに、自動で採点もしてくれるので、結果の集計も容易になりました。その機能を授業でどのように展開させていくのかを、今後考えていきたいと思っています」（阪上先生）

普通科でも、1年生全員に定期考査の練習問題を配信し、本番では配信した中から同じ問題を必ず1問入れるようにして、事前学習への意欲を高めているという。普通科担任の神野孝裕先生はこう語る。

「『Classi』導入後、生徒からの質問が増えました。解答はネット上でできますが、ネットワークの中だけにとどまらず、学校生活の場でも対策問題への質問や感想が寄せられています。ICTを使うことで、生徒との直接的なコミュニケーションも増えた実感しています。また、通学中に『Classi』を使って勉強する生徒も増えており、隙間の時間を上手に活用する力がついてきたのも大きな変化です」

普通科では、学校を欠席した生徒に

「Classi」を使った学習支援を行うほか、体育祭・学園祭の様子を動画で配信し、自宅にいても学校生活の雰囲気を感じられるようにしている。

今後は、「Classi」の活用を前提とした学習計画を学校全体で立案し、学習習慣の定着を強化していく考えだ。

安定した進学実績を上げる 指導システムの確立が課題

表現教育科の設置以来、学校の雰囲気は大きく変わり、放課後、学校に残って学習する生徒の姿も見られるようになった。また、自分から元気に挨拶する生徒が増え、身だしなみや職員

室への入退室のマナーも格段に向上した。教師も、ICTを積極的に活用しようとするなど、より能動的になった。

今後の課題は、継続して高い進学実績を上げていくことだ。

「生徒が胸を張って希望進路を選択し、それを実現していける学び舎であるとともに、母校に誇りを持ち、卒業後もいつでも帰って来られる学校であり続けたい。そして、卒業生が母校で教壇に立てたら最高です。これからも生徒のために何ができるのかを考えながら、さらに教育の質を高めていきたいと思っています」（菅野教頭）

情熱 若手教師が語る、指導変革への

英語で世界が広がることを 生徒に伝えていきたい

表現教育科教務チーフ 阪上宏樹

外国語系の大学を卒業後、民間企業の営業職を3年間経験しました。その後、退職して、国際貢献という大学時代からの夢を実現するため、青年海外協力隊として2年間、ケニアの男子の更正学校でボランティア活動を行いました。教育やスポーツを通じて少年たちと触れ合う中で、人を育てる大切さを知るとともに、私自身の経験を日本の子どもたちに伝えたいと考えようになり、英語の教員免許を生かして本校に赴任しました。

授業では、自身の経験を踏まえて、英語が使えることでどれだけ世界が広がるのかを、折に触れて話しています。最近、「英語が好きになった」「外国語大学を目指したい」という生徒も少しずつ増え、うれしく思っています。

赴任当初は、「なぜこんなルールも守れないのか」と思うこともありましたが、しかし、「リベルテマナー」が始まった頃から私の意識も変わり始め、できないことを叱るのではなく、その生徒のよいところを見て、「この力をもっと伸ばしていこう」と励ます指導に変わっていきました。

表現教育科の立ち上げ、そして発展とともに、私自身も成長できた5年間でした。教科指導、学級運営と学ぶべきことはたくさんありますが、地道に研鑽を積み、生徒の希望進路の実現を支援していきたいと思えます。